



「ナースのための行動療法（問題行動への援助）」

Rosemarian Berni-Wilbert E. Fordyce 著

大橋 正洋・前田小三郎・内山 勉 訳

本書は標題からもわかるように、問題行動をもつ患者が自立していくのを助けるのにどう対処したらよいかを示す看護婦のための手引き書である。しかし、訳者も言うように、ひとり看護婦のみでなく、慢性患者に関わる多くの人口、たとえば理学療法士、作業療法士、保健婦、療護施設の職員にも役立つそうである。

「行動変容プログラム」を一般病棟に入院するいろいろの問題をかかえた患者に対して看護婦が組み、それを実践していくわけであるが、症例が豊富で興味深い。行動変容技法は、精神薄弱児の身辺処理訓練（例えばトイレトレーニング）に使われるのは一般的だが「自立をめざす」一般患者にも適用し、多くの成功例を本書で知り得たことは、我々リハビリテーション関係者にとっても心づよい。行動変容技法に関心をもつ私などは、「よし、それでは私も本格的にトライしてみるか」という気になる。

内容は全体を12章に分けて具体例を示しながら、行動変容技法のひとつひとつを説きすめている。「望ましい行動を増加させ」（第1章）、「望ましくない行動を減少させ」（第2章）、「治療目標を明確にさせ」（第3章）、「適切な強化因子を選択し」（第5章）、「新しい行

動を形成し」（第7章）、その行動を「般化」（第9章）していくのが行動変容プログラムである。症例が実に多彩で、PT、OTにも関係の深いものが多い。「対麻痺患者の水分摂取量をふやす」「疼痛を訴える患者に活動をうながす」「老人のADLの般化」「議論好きすぎな患者」etc。

行動変容技法は誰が使ってもよい。ただし、「これを用いる人は、いつ、どのように使うべきかを知っている必要がある」と著者は最後に念を押している。この技法を使う人の倫理上の問題に最後に触れているのはさすがである。

著者のひとり Fordyce 博士はワシントン大学の心理学者で、同時にリハビリテーション医学科の教授として、行動変容プログラムを慢性疼痛患者に応用したことで著名であると云う。訳者のひとり大橋正洋氏もこの大学でこのプログラムに親しく接した経験をお持ちともれうかがった。わかりやすい訳なので PT、OT の初心者でも充分理解可能である。

(A5 頁270 図10 ¥2,800 円250 医学書院 1982)

(東京都心身障害者福祉センター 作業療法士

寺山 久美子)